

審査の結果の要旨

氏名 角道 亮介

本論文は、中国初期王朝の一つである西周王朝を主に祭祀具である青銅彝器の分析を通じて再検討したものである。

第一章では、本論文の研究主題が考古学の立場から王朝と呼ばれる社会の範囲や、王朝と地方との関係性を明らかにすることであることを述べ、各章の研究意義を説明する。

第二章では、青銅彝器の分布を丹念に集成した上で、西周時代に、長江下流域に広がっていた華東青銅器文化、湖南・江西を中心に楽器との関連がうかがわれる湘贛青銅器文化は、陝西・山西・河南を中心とする青銅器文化とは異なる性質のものとして併存しており、王朝と地方との直接的なやり取りが想定されるのは、黄河流域を中心とする西周青銅器文化圏の範囲内であるとの結論に至る。

第三章では、西周青銅器文化の範囲の中でも、西周王朝の中心地域の一つと考えられる陝西省関中平原では、殷末周初期～西周前期には青銅彝器が広範に分布するが、中期以降になるとその分布はより狭まることに着目しその意味を探る。前期の分布範囲は王朝の中心地域を示すものではなく、王朝の非構成員であった周辺の諸氏族との関係を強化し体制の盤石化を図った王朝が青銅彝器の下賜を広く推し進めた結果であり、その対象地域は基本的に西周王畿の外であったとする。逆に、前期には青銅彝器が極めて限定的にしか出ないが中期以降も分布する豊鎬から周原の区域こそが西周王畿であるとする結論に至る。

また、西周後期に、特に周原において墓への青銅器副葬と入れ替わるようにして青銅器窖藏（こうぞう）が増加する。この変化は従来、周辺異民族の襲撃の際に西周王朝の人々が隠匿したまま都を去った結果として理解されてきたが、これに反対して、葬礼の場での青銅彝器の利用を制限し、窖藏における祭礼を重要視した王朝による強い意向の結果であるとする。そして、このような祭祀行為としての窖藏が集中する周原こそが金文中で「宗周」と称される地域であったという、西周時代の社会組織について独自の理解を示す。

第四章では、周辺の諸侯国での青銅彝器の在り方を検討した上で、西周王畿を中心として、その周囲に王朝と連動した一次的諸侯が広がり、その外側には王朝の影響を非常に強く受けながらも、王朝と必ずしも連動しない二次的諸侯がひろがり、王朝の外延を形成していたと見なした。その結果として、西周王畿と一次的諸侯を含む範囲こそが西周王朝の実質的な範囲であるという、考古学から見た西周王朝の枠組みを提示している。

本論文は近年急増している西周時代の考古学的研究成果を用いて西周王朝の実態の解明に取り組み、これまでとは異なる新たな理解を示している。個々の分析には検討が不十分のところも見られるが、本論文が西周王朝社会を考える上できわめて重要な論点を提示していることに疑問はない。よって、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。